

令和7年度

# 研究紀要

令和8年3月

高知県教育センター

## はじめに

高知県では、令和6年3月に「第3期教育等の振興に関する施策の大綱」及び「第4期高知県教育振興基本計画」を策定し、令和7年3月に改定しました。本県が目指す人間像（基本理念）の実現に向け、基本目標には「確かな学力の育成と、自己の将来とのつながりを見通した学びの展開」、「健やかな体の育成と、基本的な生活習慣の定着」、「豊かな心の育成と、多様性・包摂性を尊重する教育の推進」の3点が掲げられています。さらに、これらを具現化するため、「全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進」、「子どもたちを誰一人取り残さない、多様な背景・特性・事情等を踏まえた包摂的な教育・支援の推進」、「誰もが、生涯にわたって学ぶことができる環境づくりと活動・取組の推進」、「教育・学びの充実に向けた各種施策を総合的・計画的に推進するために、必要な基礎的・基盤的な環境・体制等の整備」という4つの基本方針が示されています。私たちは今、これまでの成果と課題を踏まえ、これらの取組を次なる展開へとつなげていく重要な局面にあります。

高知県教育センターでは、「先生たちの力が 子どもたちの力に」という理念のもと、学び続ける教職員や学校を支え、ともに学び続ける教育センターとして、本県が直面する喫緊の教育課題の解決に向けて取り組んでいます。

本紀要は、高知県教育公務員長期研修生（研究生）による研究報告、および独立行政法人教職員支援機構「新たな教職員の学び」協働開発推進事業の受託による「探究型研修の転換と評価の在り方」に関する取組報告及び独立行政法人教職員支援機構に派遣された特別研修員による1年間の研修報告をまとめたものです。

研究生は、授業と授業外学習を切れ目なくつなぐ「学びのシームレス化」を推進するため、担当指導主事等との共同研究として位置づけ、実践的に取り組んできました。また、「新たな教職員の学び」協働開発推進事業においては、今年度は「探究型研修の評価の在り方」、「指導主事等の力量形成」、「令和8年度実施に向けた探究型研修の計画」を中心に据え、研修観の転換を図ってきました。関係機関の皆様には、それぞれの立場での教育実践や研究の参考として、活用していただければ幸いです。

最後になりますが、当教育センターの調査・研究の実施にあたり、ご協力いただきました市町村教育委員会、学校及び幼稚園・保育所、ご指導・ご助言くださった大学の先生方など、関係各位に心よりお礼申し上げます。

令和8年3月

高知県教育センター所長 森岡 修身

## 目 次

<b>I 令和7年度高知県教育公務員長期研修生（研究生）研究報告</b>	… 1
<b>授業と授業外学習をシームレスにつなぐ指導方法についての研究</b>	… 2
— 学習者エンゲージメントを高める授業と授業外学習の在り方について —	
高知県立岡豊高等学校	教諭 松村 詩穂
高知県教育センター	指導主事 高橋 志穂子
高知県教育委員会事務局高等学校課	指導主事 田中 和恵
<b>II 令和7年度「新たな教職員の学び」協働開発推進事業</b>	… 14
「新たな教職員の学び」協働開発推進事業に係る高知県教育センターの取組報告	… 15
学校支援部 研究開発・グローバル教育担当	
令和7・8年度「新たな教職員の学び」協働開発推進事業 中間報告	… 19
独立行政法人教職員支援機構 特別研修員 福井 ひろ子	

令和7年度  
高知県教育公務員長期研修生  
(研究生) 研究報告

# 授業と授業外学習をシームレスにつなぐ指導方法についての研究

ー学習者エンゲージメントを高める授業と授業外学習の在り方についてー

高知県立岡豊高等学校

教諭 松村 詩穂

高知県教育センター

指導主事 高橋 志穂子

高知県教育委員会事務局高等学校課

指導主事 田中 和恵

本研究の目的は、授業と授業外学習の内容に関連性をもたせることで、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するのかを明らかにすることである。授業外学習教材作成のための事前アンケート調査結果に基づき4種類の教材を作成、生徒に配付し、検証授業を通して生徒の学習者エンゲージメントが高まるのか観察を行うとともに、事後アンケート調査や授業者、生徒への聞き取り調査など多角的な視点から検証を行った。その結果、学習者エンゲージメントを高める取組が、授業と授業外学習のシームレス化を実現するために効果的で互いに相乗効果があることが示唆された。

<キーワード> 授業と授業外学習のシームレス化、学習者エンゲージメント、授業外学習教材

## 1 研究目的

### (1) 研究課題について

高知県では、第3期教育等の振興に関する施策の大綱(改訂)・第4期高知県教育振興基本計画(改訂)において、『高知家』の全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進」を基本方針の一つにしている。その基本方針に基づく施策の一つに、「授業改善サイクルの確立・授業と授業外学習を切れ目なくつなぐシームレス化」がある。

高知県内の高校生の授業外学習習慣について見てみると、高知県教育委員会が県下の高校1・2年生を対象に実施した高校生活に関する高知県オリジナルアンケートにおいて、「授業外でほとんど学習しない(15分未満)」と回答した生徒は、令和6年度は36.1%であった。高知県では、この割合を令和9年度までに30%以下に引き下げることを目標としている。英語学習に限れば、ベネッセ教育総合研究所(2019)が全国の高校1年生971名を対象に実施した「高1生の英語学習に関する調査」において「あなたは現在、学校の授業以外で、英語や英会話の勉強をしていますか。」という問いに対し74.6%が「していない」と回答した。全国的にも授業外で継続して英語学習に取り組む生徒は4分の1程度しかいないということになる。さらに、日本のみならず、「世界各国で若い学習者を取り巻く状況が急速に変化し、学習行動を阻害する要因が日々新たに生まれている。グローバル化が進んだデジタル時代を生きる若者たちは、さまざまなチャンネルの存在によって、常に大量の情報とコミュニケーションの機会にさらされている。その結果、学習者の心にはいついかなるときでも複数の影響が競合し合っていて、教育者や心理学者が考察を加えなくてはならないようなまったく新しい状況を生み出している」(マーサー, S・ドルニエイ, Z, 2022)ということから、これまで以上に生徒の学習に対する動機が実際の学習行動に結びつきづらくなってきており、生徒が意欲的に授業外学習に取り組むための指導の工夫が必要であると考えられる。

県内の高等学校では、生徒に課題を与え、その課題に関する小テスト等を実施することで授業外学習を促している。しかし、それだけでは生徒の学習に対する心理的負担や不安を高めてしまい、課題に取り組む間は授業外で学習したとしても、それ以後も授業外で学習し続ける意欲を維持させるには不十分である。また、全国の高等学校の課題として、中学校段階と比較して学校生活への満足度や学習意欲の低下が挙げられており、高等学校における教育活動を、生徒を中心に据えること

を改めて確認し、その学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するためのものへと転換することが急務となっていると報告されている（文部科学省，2021）。生徒が英語学習に対して前向きな姿勢をもつことができるようになるために、「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」状態から、「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」状態になるような授業実践や授業外学習への働きかけが必要であると考え。そこで、授業と授業外学習の内容に関連をもたせ、生徒が授業外で学習した内容が授業で活かされたと実感することにより、有能感や達成感を味わう経験をし、授業外でも継続して英語学習に取り組み、自ら英語力を高めることができるのではないかと考えるようになった。

## (2) 授業と授業外学習のシームレス化について

高知県・高知県教育委員会（2025）は、「個別最適・協働的な学びの一体的な充実及び自立した学習者の育成に向け、授業と授業外学習を切れ目なくつなぐシームレス化を進めていきます。」と述べている。生徒一人ひとりが授業内容を授業外でより深めたり、授業外で深めた内容を授業の中で他者と共有したりすることで、主体的・対話的で深い学びを実現するとともに、生徒が自らの学びを調整することで授業外でも意欲的に学習し、日常的な学びを定着していくことで、予習・授業・復習のサイクルの確立を目指している。本研究では、「授業と授業外学習のシームレス化」を、「授業と授業外学習の内容をつなげること」と定義する。

## (3) 学習者エンゲージメントについて

学習者エンゲージメントとは、感情やモチベーション（動機づけ）から引き起こされる学習行動や認知プロセスまでを包括的に捉えようとする概念である。ここでの学習行動とは、認知的関与や感情的関与といった内的側面と実際の学習行動を関連づけたものである（マーサー，S・ドルニエイ，Z，2022）。廣森ら（2024）は、エンゲージメントという言葉のもつ中核的な意味を「熱中・集中・夢中」としたうえで、モチベーション（動機づけ）とエンゲージメントについて、「モチベーションは『なぜ』私たちが行動するのかを説明し、エンゲージメントは『どの程度』私たちがその行動に関与しているかを表現します。」と示している。

モチベーション（動機づけ）に関連付けると、前項(1)で述べた「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」状態は外発的動機づけ、「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」状態は内発的動機づけであると考えることができる。生徒の学習者エンゲージメントを高め、授業と授業外学習のシームレス化を実現させるためには、内発的動機づけを充足させることが求められる。八島（2019）は、内発的動機とは、「それをする事自体から喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機」と述べている。西田（2022）は、「内発的動機づけを充足するためには自律性・有能性・関係性の3つの心理的欲求を満たす必要があります。」と述べている。西田（2022）は、自律性の欲求とは「自分で自分の行動に責任を持ちたい、選択したいという欲求」であり、有能性の欲求とは「やればできるといった自身への期待や価値を持ちたいという欲求」、関係性の欲求とは「自分の周囲の他者と良い関係性を持ちたいという欲求」のことでありと定義している。

廣森（2024）によると、学習者エンゲージメントは基本的に、「生徒が学習活動にどれだけ積極的に参加し、関与しているか」という行動的エンゲージメント、「課題の解決に向けて、生徒がどれだけ思考を働かせているか」という認知的エンゲージメント、「生徒が学習にどれだけ楽しさや興味、幸福感を感じているか」という感情的エンゲージメントの3側面から捉えられることが多いが、外国語によるコミュニケーションといった社会的側面が重視される英語授業では、「英語授業内で、生徒が他者とのやり取りにどれだけ積極的に参加しているか」という社会的エンゲージメントも重要な役割を果たしているため、4側面から捉えることが多い（図1）。

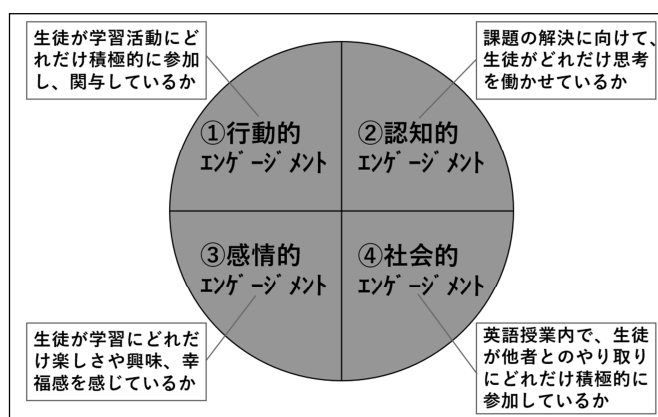


図1 学習者エンゲージメントの4側面（廣森（2024）の内容に基づき作成）

## 2 研究仮説

高等学校英語授業において、授業と授業外学習の内容に関連性をもたせることで、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するだろう。

## 3 研究方法

A高等学校第2学年25名（1クラス）を対象とし、高等学校学習指導要領における「英語コミュニケーションⅡ」の（2）読むことーI「社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を読みとり、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。」に関する指導領域を扱う単元で検証授業を実施する。授業前に生徒の授業外の学習習慣や学習内容等の実態について事前アンケート調査を実施し、生徒の実態に応じた授業外学習教材を作成する。検証授業では授業内の生徒の取組や、授業外学習教材への取組を観察する。単元終了後にも、生徒を対象に授業や授業外学習への取組について事前アンケート調査を実施し、授業と授業外学習教材の関連性をもたせることにより、生徒は授業と授業外学習双方に主体的に取り組むのか、また授業外学習時間は増加するのか、意欲は高まるのか、これらを含めて学習者エンゲージメントが高まるのかについて、行動的エンゲージメントの観点から考察する。学習者エンゲージメントを見取る際には、ドルニエイら（2022）の以下の記述を参考にすることとした（表1）。

表1 エンゲージメントと非エンゲージメントの特徴（ドルニエイら（2022）の内容に基づき作成）

	エンゲージメント	非エンゲージメント
行動的 エンゲージメント	行動の開始、努力・尽力、全力発揮、試み、持続的取り組み、専心、注意、集中、没頭、参加	先延ばし、諦め、落ち着きのなさ、中途半端、集中力の欠如、注意散漫、内向、燃え尽き・疲労、準備不足、不参加

### (1) 授業外学習教材作成のための事前アンケート調査

これまで、A高等学校では、生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態を詳細に調査することなく、教員主導で授業外学習課題を設定する場面が多く見られた。そのため本研究では、生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態に応じた授業外学習教材を作成するために、事前アンケート調査を実施する。事前アンケート調査結果から明らかになった生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態に即した授業外学習教材を作成し、生徒に配付し取り組ませることで、授業と授業外学習の内容に関連がある状況において、学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するのか検証する。事前アンケート調査の項目の設定にあたっては、ドルニエイら（2022）の「私たちの対象は言語学習者であるため、ニーズ・好み・願望・能力・文脈的状况といった5つの核となる領域を特定しなければならない。その回答は、一種のニーズ分析となり、タスクをデザインする際に組み込むべき要素を理解する手がかりとなる。」という記述を参考にしながら設定する。

ア 対 象：第2学年 25名

イ 実施時期：6月中旬

ウ 実施方法：Google フォームによるアンケート調査

エ 事前アンケート調査の内容：英語の授業外学習に対する意識

英語の授業外学習の目的

英語の授業外学習に取り組む時間

授業外学習で力を入れて取り組みたいこと

英語の授業外学習に取り組む際使用する教材

オ 事前アンケート調査結果：

事前アンケート調査「英語の授業外学習の目的」について、項目を①「宿題やテスト勉強だけでなく、自主的に英語の授業外学習に取り組んでいる」、②「宿題や定期試験、小テスト対策のために取り組んでいる」、③「定期試験や小テストのために取り組んでいる」、④「宿題が出されたら取り組んでいる」、⑤「授業外学習には取り組んでいない」とした。その結果、⑤を選択した生徒はおらず、全員が①～④のいずれかに取り組んでいることが分かった。それぞれ①12%（3名）、②32%（8名）、③36%（9名）、④20%（5名）となっている（図2）。このことから小テストや定期テスト等で良い成績を取りたいと思うことが英語の授業外学習に取り組む動機の一つになっていることが分かった。

また、事前アンケート調査「授業外学習で力を入れて取り組みたいこと」について、項目を①「単語や熟語を覚えること」、②「文法や文構造を理解すること」、③「長文が正確に読めるようになること」、④「長文が速く読めるようになること」、⑤「英語を聞いて、内容が理解できるようになること」、⑥「英文をすらすら音読できるようになること」と設定した結果、④、⑥を選択した生徒はおらず、①36%（9名）、②20%（5名）、③16%（4名）、⑤28%（7名）であった（図2）。このことから、検証授業の対象クラスでは、まとまりのある英文を正確に読むために、語彙力を増強したいと考える生徒や、リスニング力向上のために、英語の授業外学習に取り組みたいと考えている生徒が多いことが分かった。

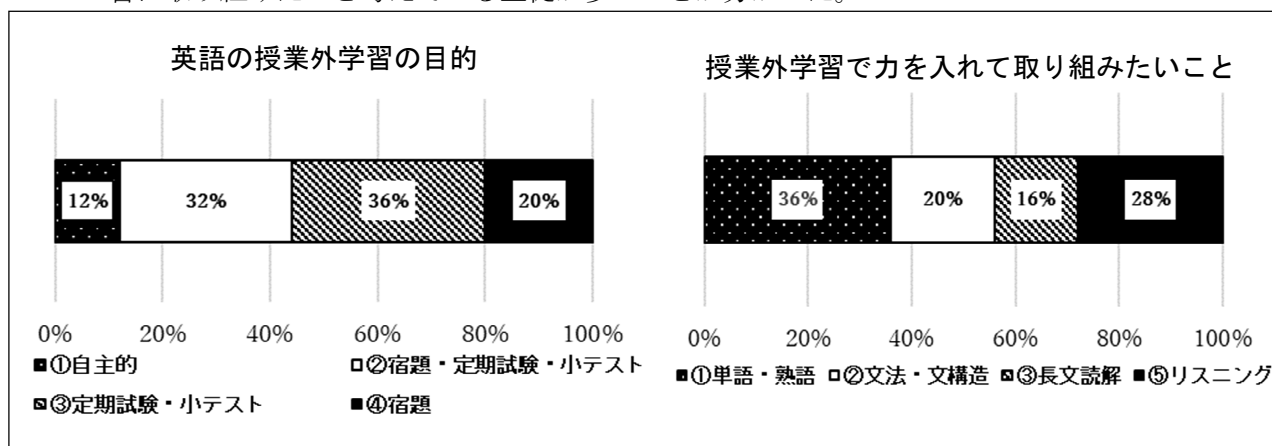


図2 授業外学習教材作成のための事前アンケート調査結果

## (2) 授業外学習教材作成

新多（2020）は、「どんな生徒にも有効な、画一的な（one-size-fit-all）タスクは存在しない。第二言語を学ぶことは複雑な営みであり、生徒達は多様な個性を持っている。」と述べている。また、特定の学習者を意識してタスクをデザインすると、教材と学習者とのつながりが強くなる。この原則は、学習者エンゲージメントを喚起し、維持するための基礎となるものである（マーサー、S・ドルニエイ、Z、2022）。このことを踏まえ、生徒が授業外で自律的に学ぶ力を身に付けるために、研究対象のクラスの生徒に実施した事前アンケート調査から分かった生徒の授業外学習の習慣や実態に即した授業外学習教材を作成する。事前アンケート調査における「授業外学習で力を入れて取

り組みたいこと」の結果に基づき、授業外学習教材は、「A. 単語・熟語力強化タイプ」、「B. 文法・文構造理解タイプ」、「C. 長文読解強化タイプ」、「D. リスニング力強化タイプ」の4種類とする。また、生徒が授業外で英語を学習する平均時間が24.1分であったため、A～Dそれぞれの教材は、1日20分以内で完了する分量とする。予習の際、スキーマ活性化のために、本文に関連した5分以内の動画を視聴できるよう二次元コードを表示し、スマートフォンやタブレットなど、生徒が使いやすい端末からアクセスできるように留意する。

山岡・田頭（2023）は、単語や熟語の定着に関して、『量』の確保が前提になります。そのためには、英和対照のリストで覚えるなど『力技』の学習活動も、ある程度は必要です。多くの表現が、少なくとも『見たことがある』と思える状態になれば、覚えて使える段階にも近づきます。」と述べており、まずは生徒が繰り返し語彙にふれる必要性を示唆している。また、安木（2014）においても、生徒の自学自習における語彙学習で単語や熟語をリスト化し、数日後にリスト化した単語や熟語の定着を自分自身で確認する学習法が効果的であると示している。このことから、「A. 単語・熟語力強化タイプ」の作成にあたっては、授業で読む英文のなかから、初めて見る単語や熟語、もしくは見たことはあるが意味を覚えていない単語や熟語を生徒自身がリスト化し学習したうえで、数日後にリスト化した単語や熟語の定着を自分自身で確認するといった内容が有効ではないかと考える。

中田・鈴木（2022）は、基礎的な文法力をつけるためには「口頭ドリル・例文暗記・ディクテーションといった言語重視の学習」が効果的であると述べている。「言語重視」とは、語彙・文法・発音といった言語形式に注意を向けることを表す。そのため、「B. 文法・文構造理解タイプ」では、教科書で扱われている文法項目の演習問題や、1年生で既習の論理・表現Ⅰや論理・表現Ⅱの教科書などから同じ文法項目が使われている英文を引用し、生徒が言語重視の学習に取り組むことで、基礎的な文法を身に付けることができるように留意する必要があると考える。

卯城・石黒（2019）は、「英文を読んで理解する」ということは、読んだ英文を「自分の経験や知識と照らし合わせて理解すること」であると定義しており、読者の脳内では、読んだ内容を文化的な背景知識と結びつけたり、スキーマを活性化させたりしていると示している。まとまりのある英文を正確に読むためには、読んだ内容に基づいて「絵」を描くように、読み進めながら文脈に応じて適宜その「絵」に修正を加え、最後まで読み進めた段階で「絵」を完成できる力を身に付ける必要があると示している。また、中田・鈴木（2022）は、「単語の意味や構文解釈といった枝葉末節にとらわれすぎると、全体像を見逃してしまう可能性が高まります。」と述べており、まとまりのある英文において、文脈を追いながら正確に読む力を身に付けるために、「句や節といった意味のかたまりで文を区切る」ことが大切であると述べている。以上を踏まえ、「C. 長文読解強化タイプ」では、英文を逐語的に訳すのではなく、意味のかたまり（チャンク）で区切りながら読むことで、まとまりのある英文を正確に読む力を伸ばすことができると考える。

中田・鈴木（2022）は、英文を黙読するときの頭の中の発音と、同じ英文を聞いたときの音声が食い違うことがなくなるようにするために、シャドーイングや音読練習に十分に取り組みせることが重要であると示している。また、山岡・田頭（2023）は、リスニング力向上のために、「弱形で読まれる箇所や、音の連結や脱落などの音声変化が起きる箇所」へ注意を向けることが重要であると示している。「D. リスニング力強化タイプ」では、このような音声的特徴を捉えながらシャドーイングや音読練習に繰り返し取り組みせることでリスニング力を向上させることができると考える。

本研究の目的は、学習者エンゲージメントを高めることによる授業と授業外学習のシームレス化であるため、「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」という状況から「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」という状況を目指すべきであると考え。そこで、事前アンケート調査結果のうち、「英語の授業外学習の目的」において①「宿題やテスト勉強だけでなく、自主的に英語の授業外学習に取り組んでいる」と回答した生徒が意欲的に学習

に取り組むことができるように、教科書で取り扱われている内容から発展した内容を教材に取り入れる。また、主体的に英語の授業外学習に取り組むためのきっかけとなるように、ICTや辞書などを活用した発展的な学習法を提示する。配付する授業外学習教材は、それぞれの生徒が事前アンケート調査で回答した「授業外学習で力を入れて取り組みたいこと」に該当する教材1種類のみとするが、検証授業実施期間中は全種類の教材を教室内に置いておき、生徒の興味関心に応じて他の種類の教材を取ることができるようにすることで、生徒が自由に取り組む課題を選ぶことができるようにする。

### (3) 検証授業

ア 対象：第2学年25名

イ 実施時期：9月上旬～下旬

ウ 実施時数：9時間

エ 科目・単元：英語コミュニケーションⅡ「Lesson6 Our Advanced Network Society」  
〔文英堂『Grove English Communication II』pp.80-89〕

オ 検証方法：

検証授業実施前に、検証授業実施者と学習指導計画の内容を共有しながら、単元の目標や、授業外学習教材と授業内容の関連性について確認する。また、検証授業実施前に、対象生徒に授業外学習教材を配付し、教材と授業の関連性や使用方法を説明する。検証授業での生徒の取組を観察および録画し、授業内容と授業外学習教材が相互に関連合っている状況における生徒たちの学習者エンゲージメントを、主に行動的側面から見取る。

### (4) 事後アンケート調査

検証授業終了後、以下の内容で事後アンケート調査を実施し、授業の目標達成度や授業外学習教材を使用することによって学習時間が増加したか、また授業や授業外学習への意欲は高まったかなどについて調査する。

ア 対象：第2学年25名

イ 実施時期：検証授業終了後（9月下旬）

ウ 実施方法：Google フォームによるアンケート調査

エ アンケート調査の内容：検証授業の内容理解度

授業外学習教材使用の有無

授業外学習教材と授業の関連性の有無

授業外学習教材使用による学習時間の変化

今後の授業外の英語学習について感じていること

### (5) 事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査

事後アンケート調査結果を分析し、本研究の結果を考察する際に参考となるような回答をした生徒を対象に、聞き取り調査を実施する。聞き取り対象となった抽出生徒の使用教材や学習者エンゲージメント（表ではEGと表記）は表2のとおりである。

ア 実施時期：9月下旬

イ 実施方法：インタビュー形式による聞き取り調査

ウ 対象：第2学年4名

表2 抽出生徒の使用教材や学習者エンゲージメント

	使用教材	検証授業前のEG	検証授業でのEG	教材へのEG
生徒a	A. 単語・熟語力強化タイプ	中程度以下	高	中程度以下
生徒b	A. 単語・熟語力強化タイプ	高	高	高
生徒c	不使用	高	高	—
生徒d	A. 単語・熟語力強化タイプ	中程度以下	中程度以下	高

## 4 結果

### (1) 検証授業

授業外学習教材と関連性をもたせた検証授業を通して、生徒の学習者エンゲージメントを見取るために、①授業観察及び録画分析、②検証授業実施者への聞き取りを行った。その結果、検証授業前と比較して顕著に学習者エンゲージメントが高まったと判断できる生徒や、授業外学習時間が増加した生徒はいなかったが、授業中に授業外学習教材と関連のある活動に取り組む際に反応のある生徒や、授業中に授業外学習教材を話題に上げるなど、授業外学習教材で学習した内容と授業に関連を感じた生徒は4、5名いた。

また、観察対象を事前アンケート調査から「学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒」、「学習者エンゲージメントが中程度と判断された生徒」、「学習者エンゲージメントが低いと判断された生徒」に絞って観察すると、学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒は、授業内容や状況に左右されず、常に速やかに活動に取りかかり、集中力を持続させていた。学習者エンゲージメントが中程度と判断された生徒は、活動に取り組むものの、集中力や注意力の持続が困難であり、授業の時間帯や活動の難易度によって学習態度にばらつきが見られた。学習者エンゲージメントが低いと判断された生徒は、居眠りや取りかかりの遅さなどが多く確認された。ただし、音読やディクテーションなど一部の活動では積極的に参加する姿が観察された。

### (2) 検証授業事後アンケート調査

事後アンケート調査の内容「検証授業の内容理解度」は四件法で尋ねた。そのうち、検証授業の理解度は、授業外学習教材使用群では回答の平均値が3.57、授業外学習教材不使用群では3.45となった。使用群と不使用群の回答の内訳は以下の通りである(図3)。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材使用の有無」は、使用群が14名、不使用群が11名となった。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材と授業の関連性の有無」は、授業外学習教材使用群を対象に、「Lesson6の授業中、『授業外学習教材で勉強したことが活かされた』と感じた活動はありましたか。」、「各パートの予習で動画を視聴したことで、英文の内容理解がしやすくなったと感じましたか。」などを尋ねた。その結果、授業外学習教材使用群全員が授業の活動において授業外学習教材で勉強した内容が活かされたと感じていたことが分かった。また、「各パートの予習で動画を視聴したことで、英文の内容理解がしやすくなったと感じましたか。」については、14名中10名が肯定的回答をしていた。否定的回答をした生徒からは、「動画の英語が難しくあまり分からなかった」などの記述が見られた。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材使用による学習時間の変化」は、使用群14名に対して、「授業外学習教材を使うことで、以前と比べて授業外の学習時間はどれくらい増えましたか。」と尋ねた。その結果、平均で14.1分増加した。一番多い生徒は30分以上増加したと回答した一方で、「変わらなかった、または減った」と回答した生徒も2名いた(図4)。事後アンケート調査の内容「今後の授業外の英語学習について感じていること」は、「今後もこのような授業外学習教材があれば、継続して取り組んでみたいですか。」、「このような授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか。」などを尋ねた。その結果、教材使用群14名のうち、13名が継続して授業外学習教材に取り組みたいと回答し、1名が取り組むたくないと回答した。回答の記述から、苦

手な分野を克服できるような授業外学習教材を選びたいと感じている生徒や、どの分野もまんべんなく力をつけたい生徒、授業外で英語学習に取り組む時間を増やしたい生徒などがあり、生徒によって授業外学習教材に求めることが多様であることが分かった。「このような授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか。」は四件法で尋ね、回答の平均値は3.3であった(図5)。その理由に関する記述では、「受験で使うから」、「外部英語試験の対策をしたいから」などに加え、「英語の勉強は楽しいから」、「将来に役に立つから」など、学習者エンゲージメントが高いと判断されるような、英語学習に対して肯定的な回答も見られた。

授業外学習教材不使用群に対して、「授業外学習教材を使用しなかった理由は何ですか。」と尋ねたところ、「部活動等で忙しくて授業外学習ができなかったから」と「授業外学習教材の使い方が分からなかったから」を選択した生徒が同数で最も多かった(図6)。授業外学習教材を配付した際に使用方法や取り組むタイミング等について説明を行ったが、それだけでは生徒に授業外学習教材の使用方法を理解させ、授業外学習に取り組む心理的負担を和らげるには不十分であったと考えられる。

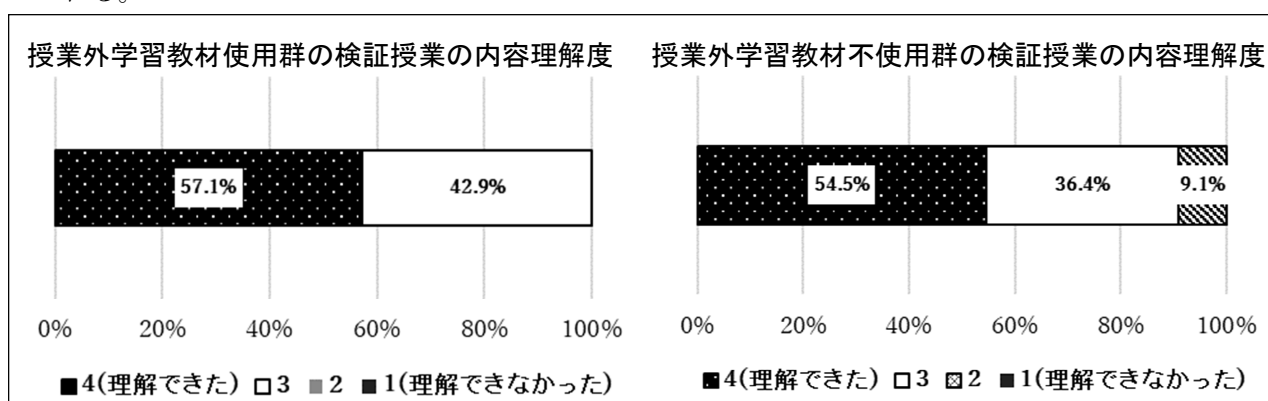


図3 授業外学習教材使用群および不使用群の検証授業の内容理解度

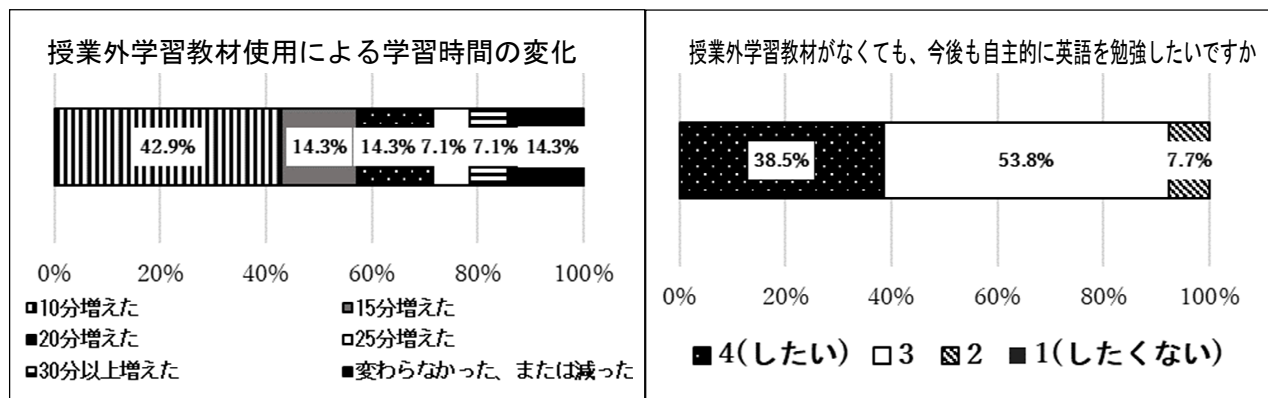


図4 授業外学習教材使用による学習時間の変化

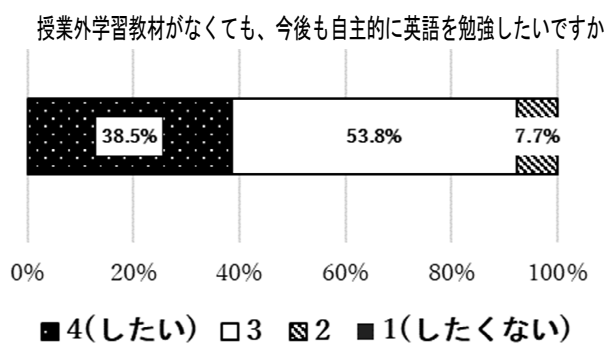


図5 授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか

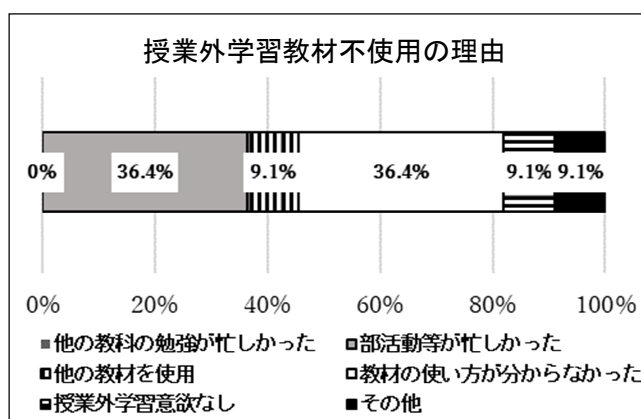


図6 授業外学習教材不使用の理由

### (3) 事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査

#### ア 生徒 a (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

検証授業の観察や検証授業実施者への聞き取り調査、事後アンケート調査の結果から、授業へのエンゲージメントは高かったが、授業外学習教材へのエンゲージメントは中程度以下であると判断された生徒である。

事後アンケート調査の「今後もこのような授業外学習教材があれば、継続して取り組んでみたいですか。」という設問に対して「取り組みたくない」と回答しており、理由を「自分のやり方で勉強したい」と記述していた。具体的にどのような授業外学習に取り組んでいるのかを中心に聞き取り調査を行った。生徒 a は、「もともと、単語の知識がなかったので、単語が分からなさ過ぎて」自主的に語彙学習を始め、教科書の英文で初めて見る単語や熟語、もしくは見たことはあるが意味を覚えていない単語や熟語に下線を引き、英和辞典や英英辞典で意味を調べ、書き込んでいくという勉強方法を確立させていた。他に取り組んでみたい教材はあるか尋ねたところ、「文法・文構造理解タイプと長文読解強化タイプはやりたい」と答えていたことから、語彙以外の学習方法も理解し、英語の授業外学習に継続して取り組みたいと考えていることが分かった。

#### イ 生徒 b (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

授業へのエンゲージメント、授業外学習教材へのエンゲージメントのどちらも高いと判断された生徒である。

授業と授業外学習教材の関連性の有無や、それによって授業へのエンゲージメントが高まったかなどについて聞き取り調査を行った。その結果、「単語を学んでいたのので、日本語訳がスムーズにあって、ずっと話せて、先の問題に進めた」と述べていたことから、授業外学習教材の内容が授業で活かされたと感じており、授業へのエンゲージメントは高かったと考えられる。また、生徒 b は、「単語を覚えたいっていうのももらったんですけど、日本史とか、地学とか、単語みたいな、英語だけじゃなくて、ほかでも暗記があるので、そういうので覚えるときに役立つと思います」と述べ、教材で学んだ学習方法を他教科の学習にも活かしたいと考えていることが分かった。さらに、教材に取り組む際に視聴した予習動画の内容が他教科の授業でも取り上げられていたことにも触れ、英語の授業で学んだことが他教科にもつながることに学習の楽しさを実感したと回答した。生徒 b は、検証授業実施中に取り組んだ授業外学習教材が 1 種類のみであったことにも言及し、年間を通して授業外学習教材が配付されるなら、多様な英語学習方法を理解したいと考えていることも分かった。

#### ウ 生徒 c (授業外学習教材不使用)

授業へのエンゲージメントは高いと判断されたが、授業外学習教材に取り組まなかった生徒である。

事前アンケート調査において、英語学習に対して肯定的な回答をしていたが、授業外学習教材に取り組まなかったことをふまえて、その理由を中心に聞き取り調査を行った。その結果、「大体の内容が授業内で頭に入っているから、わざわざする必要ないかな」と感じており、「授業外で学習しないといけないという気持ちにならない」と述べていた。今回は授業外学習教材を課題として課していないため、提出を求めたり、成績に加味したりしなかったが、もし課されていた場合は取り組んだかについて尋ねると、課されていたとしてもやらなくてよいという気持ちは変わらなかつたろうと回答した。さらに詳しく質問していくと、「リスニングも、授業で音声を流してくれるし、わざわざ授業外でやらなくていい」と思っていると述べた。授業外学習の必要性を感じていない原因には、授業外学習を面倒に感じる気持ちと、授業内で学習が完結しており、それ以上に発展的な学習に取り組む必要を感じていない気持ちがあることも分かった。

#### エ 生徒d (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

授業へのエンゲージメントはあまり高くなかった一方で、授業外学習教材へのエンゲージメントは高いと判断された生徒である。

授業へのエンゲージメントがあまり高くなかったことについて、聞き取り調査を行った。その結果、生徒dは「この授業に対して進んで取り組もうと思っていたんですけど、すぐに終わったので、じゃあいいかとなりました」と述べていた。ペアで英語で話す活動に向け、教材を使って入念に準備をしていたが、授業ではペアで話す時間を十分に確保できていなかった。授業外学習で準備してきたことが授業で活かせなかったことによって授業へのエンゲージメントが低下したことが分かった。

授業外学習教材について、どのようなところが取り組みやすかったか尋ねると、これまで授業外での学習方法が分からず思うように取り組めなかったが、学習方法の目的別に複数の教材があり、それらをいつでも使うことができるようになっていたことで、4種類すべての教材に取り組み、授業外学習に意欲的に取り組むことができていたことも分かった。また、予習に関して「単語帳よりも覚えられた。前日やったのに、次の日も頭に入った状態で、動画も観たので、授業の時になっても覚えていたし、やりやすかった」と述べていた。今後は、授業外学習教材がなくても授業外学習に取り組むことができるようになるために、まずは授業外学習教材を使って英語学習の方法を身に付けたいという考えを持っていることも聞くことができた。

## 5 考察

### (1) 授業と授業外学習のシームレス化

本研究では、「授業と授業外学習のシームレス化」を、「授業と授業外学習の内容をつなげること」と定義した。授業と関連性をもたせた授業外学習教材を作成して生徒に配付し、生徒がそれに取り組むことで、授業の中で授業外学習が活かされた実感を持ち、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するのかについて検証・分析を行ってきた。

検証授業の観察および検証授業実施者への聞き取り調査から、検証授業実施前から学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒は、全員が事後アンケート調査で予習動画やその他の授業外学習が授業に活かされたと感じたと回答していた。また、英文の内容をイメージしたり、理解したりするために授業外学習教材が役に立ったことも実感していた。このことから「英語学習が楽しいから授業外学習に取り組む」という状況の実現に、授業と授業外学習をシームレスにつなぐことは有効であると推察される。生徒が授業外学習への意欲的な取組が授業理解に活かされると実感するためには、生徒の学習者エンゲージメントを高めることが必要不可欠であり、授業や授業外学習への生徒の学習者エンゲージメントを高めることと、授業と授業外学習のシームレス化には相乗作用があるのではないかと考えられる。そのために、授業における教師の発問や働きかけ、中長期的な視座に立った授業と授業外学習の包括的な計画の作成、実施など、生徒の実態に即した指導の工夫が求められる。

### (2) 学習者エンゲージメントを高めるための授業者の働きかけ

授業と授業外学習をつなぐ際、二つ留意すべき点があると考えられる。まず、教室での学びが授業外学習につながる仕掛けを作ることである。事後アンケート調査結果から抽出した生徒を対象に行った聞き取り調査では、生徒cは、授業の中で授業者から授業外学習の必要性を感じるほど十分に知的な好奇心が刺激される発展的な問いかけがない結果として、学習内容を授業中にほぼ理解できると自己評価し、学びを授業内で完結させていたと考えられる。このような生徒の学習者エンゲージメントを高めるためには、教室での学びが教室外にもつながっていることを実感させ、授業の内

容について授業外でも深めたいくなるような授業者の働きかけや、生徒の知的好奇心を刺激し、「もっと知りたい」という気持ちにさせるような発問をしたり、場面を設定したりすることが求められると考えられる。

また、授業外学習が教室での学びにつながる仕掛けを作ることである。授業者は、生徒dのように単元の内容を自分の生活に引きつけ、クラスメイトと活発に自身の経験や考えを話そうと準備していた生徒が活躍し、そのような生徒に触発されて他の生徒の学習者エンゲージメントも高めることができるような場면을授業の中に設定することも求められる。そうすることで、学習者エンゲージメントの高い集団を形成することも可能であると考えられる。いずれにしても、教材の内容や生徒の学習にエンゲージしながら、クラスや生徒の実態に即した発問をするなど授業者の働きかけが重要な役割を果たすと考える。

### (3) 授業と授業外学習教材の一体的な計画

事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査から、生徒が授業外学習教材の種類を選択できるということは、生徒の授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となることが分かった。これは、自律性の欲求とも関連があるものと考えられ、生徒自らが使用する授業外学習教材を選択し、自身の学習に責任を負っているという感覚が、授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となりうる可能性を示唆している。また、授業外学習教材を使用することで、英語学習の方法を理解できたと感じている生徒が多いことから、授業外学習教材自体も生徒の授業外学習への意欲を喚起する端緒となると推察できる。生徒aのように、自分に合った語彙学習のスタイルが定着している生徒も、その他の学習方法を理解するために、使用する授業外学習教材を選ぶことができれば、授業外学習へのエンゲージメントを高めることにつながると考えられる。生徒bや生徒dも、授業外学習教材を使用することで授業外の英語学習方法を理解し、いずれは授業外学習教材がなくても自主的に授業外学習に取り組めるようになりたいと考えている。このことから、生徒が学習方法を理解するまで、授業者が中長期的な視点をもって授業と関連性をもたせた授業外学習計画を包括的に設計することで、生徒は授業外学習が授業に活かされる実感を持ち、授業外学習習慣の定着につなげることができるのではないかと考える。

事後アンケート調査結果において、授業外学習教材不使用群に尋ねた教材不使用の主な理由は「使い方が分からなかったから」、「部活動等で忙しくて授業外学習ができなかったから」であった。このことから、授業外学習教材を使用しなかった生徒が、今後使用するようになるためには、授業外学習教材を導入する際にオリエンテーションを充実させ、生徒が使用方法を十分に理解し、短時間でも取り組むことができることを実感させることが必要であると考えられる。導入後は、生徒の授業外学習教材への取組を観察し、必要に応じて使用方法の説明や、個別指導などの支援を通して、生徒の授業外学習へのエンゲージメントを高めると同時に、面談等を実施し生徒が自身の学習習慣についてメタ認知できる機会をもつことで、授業外学習習慣を定着・充実させることができると考える。

したがって、授業と授業外学習のシームレス化を実現するためには、生徒の現状を理解し、高等学校入学から卒業までに生徒に付けたい力や資質・能力を明確に設定し、そこに至るまでの指導過程を、授業内外の学習活動を含めて構想する必要があると考える。授業内の生徒の姿を中心に考えてきたこれまでの学習指導計画に加え、授業外学習の内容も一体的に設計した授業を実践することが、主体的に授業外学習に取り組む生徒の育成につながるのではないかと考える。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

成果として3点挙げる。

生徒が自身の興味や実態に応じて複数の授業外学習教材から使用するものを選択できることが、

生徒の授業外学習に対する内発的動機づけの喚起につながることに加え、授業外学習教材の使用が英語の授業外学習方法の理解につながっていた。このことから、自律性の欲求の充足が、内発的動機づけを喚起し、学習者エンゲージメントを高める要因となりうるということが分かった。

また、二次元コードからアクセスするだけで簡単に授業に関連のある予習動画を視聴できるような教材を作成したことで、多くの生徒が予習動画を視聴した。デジタル化が進んだ現代の高校生にとって、「スマートフォンやタブレットで動画を見る」という行為は身近なものであり、学習と結びつけることで、学習に対する心理的負担の軽減につながり、学習者エンゲージメントを高めることにつながるということが分かった。

本研究では、仮説の検証のために事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査を実施した。授業外学習教材の使用による効果や授業の内容理解への影響についての聞き取り調査を通して、抽出生徒は自身の授業外学習について省察する機会を得たことにより、授業外学習習慣や学習方法に対するメタ認知が深まったものと考えられる。このように、生徒が自身の授業外学習習慣や学習方法について言語化し、振り返る機会を持つことで、授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となりうるということが分かった。

## (2) 課題

生徒の学習者エンゲージメントを高め、授業と授業外学習のシームレス化を推し進めていくためには、生徒の授業外学習習慣の定着を目指した中長期的な視点での組織的な指導計画の作成および実施が必要であることが課題として挙げられる。生徒は授業外学習教材の使用を通して、教科の内容を理解することだけでなく、その学習方法を理解することも望んでいることが分かった。生徒が、自己のレベルや状況に合わせた授業外学習教材を継続的に使用し、学習方法を理解することで、学習者エンゲージメントを高め、自ら授業外学習に取り組むようになるためには、高校3年間を見通し、教科や学年団全体での指導計画の作成、実施が求められる。また、複数の授業外学習教材を提供するためには、複数の教員が協働して作成にあたるのが欠かせない。今後は、教科や学年団の教員と協働し、授業外学習も包括的に設計された指導計画を作成し、授業と授業外学習をシームレスにつながぐことを意識した実践や生徒への個別の支援によって学習者エンゲージメントを高め、高校3年間の学習を通して自ら意欲的に授業外の英語学習に取り組む生徒の育成を目指していきたい。

## 【参考・引用文献】

- 文部科学省 (2018) : 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編、開隆堂
- 文部科学省 (2021) : 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料
- 高知県教育委員会 (2025) : 第 3 期教育等の振興に関する施策の大綱 (改訂) 第 4 期高知県教育振興基本計画 (改訂)
- サラ・マーサー, ゴルタン・ドルニエイ (2022) : 外国語学習者エンゲージメント 主体的学びを引き出す英語授業、アルク
- 石黒圭・卯城祐司 (2019) : 英語・日本語を読んで理解するとはどういうことか、英語教育、第 68 巻、第 10 号、pp. 10-11
- 中田達也・鈴木祐一 (2022) : 英語学習の科学、研究社
- 西田理恵子 (2022) : 動機づけ研究に基づく英語指導、大修館書店
- 新多了 (2020) : 自律的に学力を育てる課題とは?—第二言語習得の視点から、英語教育、第 69 巻、第 7 号、pp. 10-11
- 廣森友人・小金丸倫隆 (2024) : エンゲージメント×英語授業 「やる気」と「意欲」を引き出す授業の作り方、明治図書
- 廣森友人 (2024) : 学習者エンゲージメントについて知っておきたい 3 つのこと、英語教育、第 73 巻、第 3 号、pp. 36-37
- 八島智子 (2019) : 外国語学習とコミュニケーションの心理—研究と教育の視点—、関西大学出版
- 安木真一 (2014) : 英語力がぐんぐん身につく! 驚異の英単語指導法 50、明治図書
- 山岡大基・田頭憲二 (2023) : 英語授業デザインマニュアル、大修館書店
- ベネッセ教育総合研究所 (2019) : 高 1 生の英語学習に関する調査

令和7年度  
「新たな教職員の学び」  
協働開発推進事業

# 「新たな教職員の学び」協働開発推進事業に係る高知県教育センターの取組報告

研究開発・グローバル教育担当

## 1 はじめに

高知県教育センターでは、令和5年度より独立行政法人教職員支援機構（以下、「NITS」という）の「『新たな教職員の学び』協働開発推進事業」を受託している。高知県では中堅期以降の教員に対する研修の機会が少なく、教員免許状更新講習に替わる研修として教育活動を組織的・協働的に推進できる実践的指導力の向上を図ることを目的に、探究型研修として採用20年目の教員を対象とした「発展期教諭等研修」を開発し、令和6年度に試行実施、令和7年度より本格実施している。また、共創できる教員及び自走する組織の一員として学び続ける教員の育成を目指し、令和8年度から教育センターの他の研修にも探究の要素を取り入れる準備と探究型研修の評価の在り方の検討を行った。ここでは、その取組（図1）の報告を中心に、2年目を迎えた発展期教諭等研修の紹介を行う。

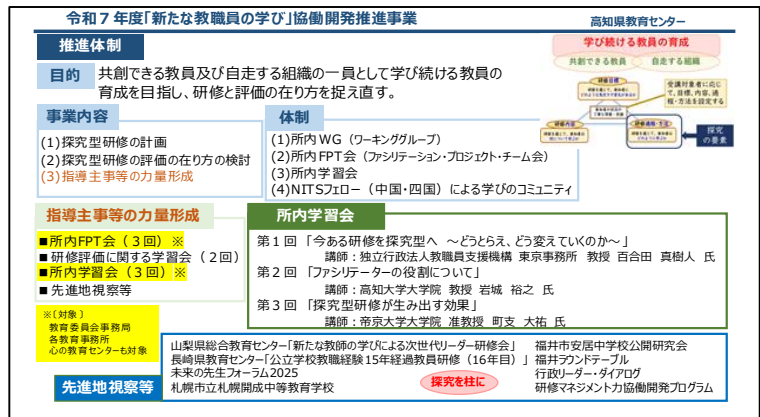


図1 令和7年度「新たな教職員の学び」協働開発推進事業の取組

## 2 取組の内容

令和7年度は、(1)令和8年度実施に向けて探究型研修の計画、(2)探究型研修の評価の在り方の検討、(3)指導主事等の力量形成の3点を柱に取り組んだ。これらの取組を進めるうえで、教育センター内でWG（ワーキンググループ）をつくり、定期的にWG会を実施した。

### (1) 令和8年度実施に向けて探究型研修の計画

発展期教諭等研修の他にも探究型研修への転換を図るために、WG会を通して既存の研修に探究の要素を取り入れ、令和8年度から3年経験者研修、中堅教諭等資質向上研修、発展期教諭等研修、新任特別支援学級担任研修、中堅教諭等資質向上研修〔保育者〕、任用2年次教頭研修「課題解決研修」、教科研究センター基礎講座、外国語スキルアップ研修を探究型研修として実施することとした。併せて、これら8つの研修について研修デザイン上の工夫や評価の在り方、探究のレベルを検討した。特に研修をデザインするうえでは、対話やイントロダクションの設定、自身の実践や学びの省察を促すしかけ、教員育成指標と研修との関連の明確化、集合研修と在籍校の往還的な取組の強化などの工夫を考えた。また、研修運営側と受講者が共通認識をもって研修を進めていくことができるように、「研修の三角形」（図2）という所内統一の枠組みで示すことにした。「研修の三角形」には、研修の目的を達成するための具体的な研修目標、研修を通じて参加者は何を学ぶかという研修内容、研修を通じて参加者はどのように学ぶかという研修過程・方法を示すとともに、参加者の状況や研修構成、研修デザイン上の工夫も示した。

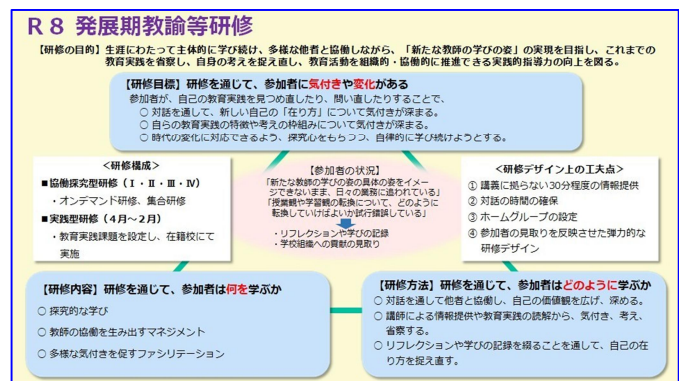


図2 研修の三角形（例：発展期教諭等研修）

## (2) 探究型研修の評価の在り方の検討

探究型研修の評価の見取り方や分析について学ぶことを目的に、講師を招聘して研修評価に関する学習会を2回実施（7月18日、10月27日）した。学習会では、すでに実施している探究型研修と探究の要素を見出した研修について、受講者のアンケート回答や成果物から研修の評価及び研修の在り方について助言をいただいた。その中の発展期教諭等研修の助言内容を紹介しておく。

発展期教諭等研修は、対話を中心とした協働探究型研修と、自ら設定した教育実践課題の解決に向けた実践型研修で構成している。協働探究型研修のアンケート回答及び受講者の学びの記録をもとに、研修の目的に沿って「学びの深まり」に焦点を当て、三つの視点で助言をいただいた。1点目は、受講者にとって研修初期の対話の価値は「交流」や「自己省察」が主であったが、対話を重ねることで内省が促され、キャリアの振り返りや自己理解が深化されるとともに、実践的探究へのきっかけにつながるといった質的な変化が見られたことである。2点目は、講義と対話から探究活動を行うための知識や物の見方が形成され、概念理解の深まりが見られたことである。3点目は、教育実践課題に対する意識が研修を通じて具体となり、協働探究型研修の学びが実践への意欲の高まりに結び付いていることである。記述から研修初期は受講者に自信のなさが見られることから、研修で得た学びを実践に移す際に直面する障壁に対応できるよう、受講者の実践を支援する仕組みの構築が課題であることが分かった。

研修評価に関する学習会を通して、探究型研修では、研修運営側が研修を俯瞰して評価するだけでなく、受講者自身の自己評価につなげるとともに、中・長期的スパンで受講者の行動や実践の変容を丁寧に見取る必要があるとの示唆を得た。そのためにも、カークパトリックの4段階評価モデルと関連付け、研修を大きく「反応」、「学習」、「行動」、「成果」に分けて4件法と自由記述を組み合わせることで評価の見取りをしていくことが重要となる。研修の改善や受講者自身の自己評価につながる項目は4件法で見取り、受講者の行動や実践の変容は自由記述で丁寧に見取ることに加え、研修が組織に与える影響を見取るために、受講者が所属する学校の管理職や同僚へのヒアリングを実施できると理想である。こうして見取ったことを研修の目的や構成要素に分解しながら分析し、研修効果を確認することで研修の在り方のPDCAサイクルを実行していきたい。

## (3) 指導主事等の力量形成

### ① ファシリテーションプロジェクトチーム会（FPT会）

令和7年度の新たな取組である中堅教諭等資質向上研修と発展期教諭等研修の合同開催において所員がファシリテーターとして携わるにあたり、ファシリテーターの役割の理解と実践力を高めることを目的として3回開催した。初心者向けの「理論と実践コース」、経験者向けの「実践コース」に分けて各回90分程度で実施した。3回目は教育委員会事務局へも案内を行い、所外からも参加があった。各回、ファシリテーターの目的や心構えについて触れた後、様々なことをテーマにファシリテーター役を交代しながら対話を行い、対話による深まりを自ら経験した。また、FPT会での学びを生かして、実際に研修マネジメント力協働開発プログラム（全国版）にファシリテーターとして参加することで、理論と実践を往還させた。

### ② 所内学習会の実施

研修観の転換について県内への普及を目的に、参加対象を、教育委員会各事務局や各教育事務所等に広げて、所内学習会を3回開催した（表1）。第1回は、研修観の転換を図ることを目標とした。講義の中で探究の必要性について所員同士で話し合う時間が設定され、社会と学びの変化を自分事として捉え、視座を高め、視野を広げる研修デザインの必然性について再考することができた。第2回は、ファシリテーションプロジェクトチーム会の学びを深め、受講者の気付きや内省を促し、協働的な学びが深まるよう、所員のファシリテーション力の向上を目標とした。演習を通してコミュニケーションの難しさや面白さを体験するとともに、意見を引き出すことの重要性や議論の熟成度の見極め方などを体験を通して学んだ。第3回は、探究型研修が生み出す効

果について知り、探究型研修の構築を図ることを目標とした。共通の事例を読んで同じ問いについて考える個人活動の後にグループでじっくり対話し、多様な価値観に触れる中で、自身の「観」の偏りや「観」を支える土台に気付き、内省を深めるプロセスを体験した。体験を通して、探究が対話を促し、対話が深い内省を生み、内省が新たな探究につながる循環的な学びや、「観」が他者との対話によって揺さぶられる経験が行動変容につながることを理解につながった。

表1 令和7年度所内学習会

第1回 9月24日	内容：「今ある研修を探究型へ～どうとらえ、どう変えていくのか～」 講師：独立行政法人教職員支援機構 東京事務所 教授 百合田 真樹人 氏
第2回 12月8日	内容：「ファシリテーターの役割について」 講師：高知大学大学院 教授 岩城 裕之 氏
第3回 12月19日	内容：「探究型研修が生み出す効果について」 講師：帝京大学大学院 准教授 町支 大祐 氏

### ③ 先進地視察等

探究を柱として、先進的取組をしている他県の学校や研修等の視察や研修会等への参加を行った(表2)。これらの活動で得たことをWG会で情報共有し、各ラインの研修デザインに生かした。また、令和5、6年度NITS特別研修員による他府県とのつながりや、NITSフェロー(中国・四国版)による研修マネジメント力協働開発プログラムへの参加を通して、徐々に学び合いのコミュニティが広がり、他府県との情報共有につながっている。

表2 令和7年度先進地視察等

5月	9日	第1回研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)打合せ
	21日	第1回研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)ガイダンス参加
	30日	第1回研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)メインプログラム参加
6月～2月	研修マネジメント力協働開発プログラム(全国版)受講	
7月5、6日	実践研究福井ラウンドテーブル2025サマーセッション参加	
7月17日	研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版) 第1回また集まってみたよ!の会参加	
7月24日	山梨県総合教育センター 新たな教師の学びによる次世代リーダー研修会視察	
9月14、15日	未来の先生フォーラム2025参加	
10月3日	第2回研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)参加	
10月6日	研修マネジメント力協働開発プログラム(全国版)参加(ファシリテーター)	
10月24日	札幌市立札幌開成中等教育学校視察	
10月31日	長崎県教育センター 公立学校教職経験15年経過教員研修(16年目)視察	
10月31日	教育行政リーダー・ダイアログ(中国・四国版)参加	
11月14、17日	研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版) 第2回また集まってみたよ!の会参加	
11月21日	福井市安居中学校公開研究会参加	
1月23日	研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版) 第3回また集まってみたよ!の会参加	
2月10日	山梨県総合教育センター 新たな教師の学びによる次世代リーダー研修会参加(ファシリテーター)	
2月21、22日	実践研究福井ラウンドテーブル2026スプリングセッション参加	
2月26日	研修マネジメント力協働開発プログラム(全国版)参加(ファシリテーター、協働者)	
2月27日	第3回研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)参加	

### 3 2年目を迎えた発展期教諭等研修

試行実施の成果と課題を踏まえて、令和7年度は次の5点を変更した。1点目は、研修目的に「自身の考えを捉え直し、教育活動を組織的・協働的に推進できる実践的指導力の向上を図る」を追記したことである。2点目は、研修のねらいを令和6年度の「高めたい力」から「目指したい姿」と「高めたい探究の力」の二つに増やし、それぞれ具体的に示したことである。特に「高めたい探究の力」は、令和6年度に示した三つの力の中の「探究する力」を「共創する力」に変え、その具体を「新たな価値を創造し、人と学びと組織をつなぐ」とした。3点目は、構成する二つの研修について、共通

研修を「協働探究型研修」に、自主研修を「実践型研修」に変更し、「協働探究型研修」では「気づきを深める」ことを、「実践型研修」では「実践的指導力を身に付ける」ことを追記したことである。4点目は、「協働探究型研修」の最後をオンラインによる半日開催から集合による1日開催としたことである。午前中は中堅教諭等資質向上研修と合同開催し、発展期教諭が中堅教諭の1年間の取組に対する発表のファシリテーターをすることで、中堅教諭の学びを深める役割を担い、これまでの研修の理論と実践の往還を図ることとした。併せて、「令和8年度以降の当研修におけるファシリテーターとして協力をお願いします」ことを概要に示した。5点目は、研修の記録を「1年間の軌跡」から、様式を指定しない「学びの記録」に変更したことである。教育実践課題、設定理由、目指す姿、「教師として転機になったこと」、「教師として大切にしてきたこと」を集合研修1回目（協働探究型研修Ⅱ）までに記載し、研修での気づきや学びを追記しながら、協働探究型研修後に提出し、確認後は返却するやりとりを繰り返した。そして、1年間の最後に研修の気づきや学び、今後の展望を記述して提出することとした。令和6年度の「1年間の軌跡」は、グループ内で進捗状況を共有することを目的としてクラウド上で共有していたが、他者に見られることで十分な内省ができないと考え、令和7年度の「学びの記録」は共有しないこととした。

また、研修評価に関する学習会及び所内学習会での学びをもとに、試行実施の「成果」を検証するため、研修終了半年後以降に、受講者と管理職に異動がなかった学校の中から5校の学校長を対象にヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の主な視点は、①受講者が教育実践課題に取り組むことによる学校組織へ影響があったこと、②受講者が教育実践課題に取り組むうえで支援したこと、③研修を受けて受講者に見られた変化、④受講者が教育実践課題に取り組むうえで相談を受けたこと、⑤学び続ける教職員に関して管理職として思うこと、⑥発展期教諭等研修に期待することの6点である。①では、研修受講を契機に管理職と該当教員の情報共有の機会の増加や、周囲との組織的な協働が促されるといった、学校全体の教育実践力向上に良い効果をもたらしているという回答があった。②では、受講者が教育実践課題に取り組み、専門性を発揮できるよう組織体制を整えた学校があった。③では、学校組織を俯瞰して見る意識の芽生えや、自身の役割やキャリア意識の自覚において前向きな変化につながった例があった。④では、受講者から日常的に情報共有や相談を受けた例があった。⑤と⑥では、経験や勘に頼るのではなく、変化に対応していく主体的な姿勢が重要であり、今後のキャリアへの示唆を与えるとともに、他校種・他分野の教諭との対話を通じて新たな視点や情報を得る機会として受講に臨むことを期待しているという回答があった。これらのことから、研修の機会が減った発展期教諭にとって新しい知見を得るだけでなく、これまでの実践を振り返る好機となるよう研修をデザインしていく必要がある。

#### 4 成果と課題

本年度は、WG会を通して、各研修の現状を共有し、探究型研修として実施する研修について、探究のレベルを確認するとともに、「研修の三角形」という共通の枠組みで整理し、研修の目標を受講者と共有することで研修効果を高める基盤ができたことは成果である。

研修評価に関する学習会及び所内学習会から、当センターの研修は個々の教職員の学びを主とした評価になっていることが分かった。研修を通して教師自身が社会の大きな変化を実感し、多角的な視点から教育を捉え直す機会を提供することで探究の動機付けをしていくとともに、経験を質的に深め、言語化し、他者と共有することで経験の価値を高める研修を考えていく必要がある。また、個々の教師の成長だけでなく、教員組織の変化を目指した研修を考えていく必要もある。そのために、研修評価を分析する明確な視点をもって、研修デザインをしていくことが課題である。

#### 【参考文献】

中原淳、関根雅泰、島村公俊、林博之（2022）：研修開発入門「研修評価」の教科書―「数字」と「物語」で経営・現場を考える、ダイヤモンド社

# 令和7・8年度「新たな教職員の学び」協働開発推進事業 中間報告

独立行政法人教職員支援機構 特別研修員 福井 ひろ子

## 1 はじめに

高知県教育センターでは、令和5年度より独立行政法人教職員支援機構（以下「機構」という）の『新たな教職員の学び』協働開発推進事業を受託している。ここでは、その一環として、令和7年度に特別研修員として機構つくば本部で実施した研修および協働開発の取組内容について報告する。

## 2 教職員支援機構と本事業の目的

機構は、教職員への総合的支援を行う全国的な中核拠点として、校長、教員その他の学校教育関係職員に対する研修や教員の資質能力向上に関する調査研究等を実施している。

また、中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会』で示された『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）（令和3年11月15日）において、教員免許更新制の発展的解消後の「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた方策とともに、教職員支援機構の果たすべき役割が明示された。

これを受けて、令和5年4月に、『探究型』の教職員研修の開発、「教育行政リーダー研修の開発」、「新たな学び」を牽引するオンライン研修の開発、「プラットフォーム等を通じた全国の教職員研修の支援」などを推進する、「次世代型教職員研修開発センター」を、令和6年4月に「教職員の学び協働開発部」を新たに設置し、「研修観の転換」を通じた「新たな教職員の学び」を実現する研修を推進している。

本事業は、機構と教育委員会や大学等が連携し、「令和の日本型学校教育」における新たな教職員研修の開発を行うとともに、新たな教職員研修の企画立案・運営を担う人材の育成を図ることを目的とするものである。

図1は、機構が「教職員の新たな学びの姿」の実現に向けた当面の取組を、「NITS戦略～新たな学びへ～」として令和4年7月にまとめたものである。



図1 NITS 戦略

## 3 取組の内容

特別研修員の役割は、(1)年間を通して、機構の「研修マネジメント力協働開発プログラム（以下「NITSマネプロ」という）に参画、(2)教職員研修の企画立案及び運営、全国の教職員研修に関する指導・助言・援助の企画立案及び実施、都道府県市教育センター等における出前研修講師等の実務の実地経験、(3)機構の調査研究プロジェクトに参画、(4)派遣元の教育委員会や教育センター等が、当該年度や翌年度以降に実施する新たな教職員研修の企画立案や運営に携わることである。

### (1) NITSマネプロへの参画

機構では、「研修観の転換」に向けた「新たな教職員研修」の協働開発に向けて、全国の教育委員会から派遣された特別研修員（令和7年度は5名の参加）をはじめ、機構に在籍する教職員が対話・協働しながら探究を行う「NITS研修マネジメント力協働開発プログラム（NITSマネプロ）」を、月1～2回程度の頻度で行っている。1回2～3時間の対話を中心とした活動で、「探究型研修」の在り方を考えることや、研修マネジメント力（組織内で研修を企画する際に必要な力）を身につけるこ

と等を目的としている。令和7年度NITSマネプロの各回の内容は表1のとおりである。年間を通してNITSマネプロに参画する中で、この学びの場が単に研修観について意見を交換する場にとどまらず、参加者同士の同僚性を高め、その成果が機構の研修運営や改善へと組織的に生かされていることを理解することができた。また、自らの気付きを綴りながら実践を振り返る過程を通して、研修そのものに対する視点だけでなく、学校や子供の姿の捉え方についても新たな視点を得る貴重な機会となった。

表1 令和7年度NITSマネプロ

日 時	内 容 等
第1回 4月10日 13:30～16:30	ガイダンス（本プログラムの年間の大まかな流れ、ねらい等の説明）、自己紹介
第2回 4月24日 10:00～12:00	テーマ:今、求められている「新たな教職員の学び」とは
第3回 5月12日 10:00～12:00	テーマ:これまでに「教職員の学び」について考えたこと、今考えていること
第4回 5月23日 13:30～15:30	テーマ:探究とは
第5回～7回	テーマ:「探究」について探究する
第8回 6月30日 10:00～12:00	テーマ:グループファシリテーションについて
第9回 7月23日 13:30～15:30	グループで検討した内容の共有
第10回 8月28日 13:30～15:30	テーマ:あらためて考える「探究型研修とは」
第11回 9月16日 9:00～12:00	これまでの自身の実践と学びを振り返り、語り聴き合う
第12回 10月7日 10:00～12:00	テーマ①:あらためて「マネプロ」について問い直す テーマ②:今後の自分自身の「問い」を考える
第13回 11月7日 10:00～12:00	テーマ:「あらためて・・・コミュニティって?」
第14回 11月25日 13:30～15:30	テーマ①:コア研修（探究的な学びコース）について振り返る テーマ②:テーマ別探究について
第15回～17回	テーマ:「探究したいこと」について探究する
第18回 2月12日 10:00～12:00	テーマ:テーマ別探究の発表
第19回 2月24日 10:00～12:00	テーマ①:グループごとに前回の報告を振り返る テーマ②:「研修観の転換」について
第20回 3月12日 13:30～17:00 3月13日 9:00～17:00	NITS職員・関係者等の「これまでの自身の学び」について学びの場をデザインする

## (2) 教職員研修の企画立案及び運営

特別研修員として令和7年度に主に担当した研修は、①「第3回校長研修(10月20日～10月24日)」、②「体力向上マネジメント指導者養成研修」、③「研修マネジメント力協働開発プログラム(中国・四国版)」である。研修の目的・内容・方法等の検討(前年度からの改善)や講師との連絡調整、運営マニュアルの作成、緊急時の対応、研修運営等に携わった。

### ① 「校長研修」(職階別中央研修)

校長研修の目的は、急激に変化する時代の中で、学校のあるべき姿の実現に向けて、学校や当該地域において、その実現に向けた取組を促進しようとする意識・力量を高め、地域の中核となる校長を育成することである。

校長研修は5日間の日程で実施し、参加者は事前課題として所属校の現状と課題を様式にまとめて提出することになっている。研修初日の午後は、所属校の現状と課題を明確化するために、令和3・4年答申を読み、学びに向かう問いを立てる時間を設定した。また研修期間中は毎日、自身の学びを言語化し、他者と対話し、気付きを綴るために、イントロダクションとリフレクションの時間を設定した(表2)。5日目の午後は、所属校における学校改善計画を策定する時間を設定した。研修終了後は、策定した学校改善計画に基づき、各学校や地域において具体的な改善の取組を長期的に実践することを通して、校長としての自らの教育実践の特徴や考えの枠組みに気付くことを、本研修の目標としている(図2)。

職階別研修には、校長研修のほか、副校長・教頭研修、中堅・次世代リーダー研修、事務職員研修がある。一年間の研修を終えると、職階別研修担当チームで研修の目的や目標(研修を通じて参加者にどのような気付きや変化を求めるのか)を見直し、次年度に向けた改善を図っている。機構には、AARサイクル(見通し、行動、振り返り)を意識し、多様な意見を受け止め、変化を厭わない組織文化が根付いている。これは、単なる「研修内容の更新」とどまらず、研修そのも

のが目指すべき姿を絶えず問い続け、状況の変化に応じて再構築していくという、柔軟で持続的な改善の営みである。また、研修の効果を参加者個人の学びにとどめず、所属先の組織マネジメントへどのように接続するかということが重視されている。特に、学校組織の課題解決を担うリーダーとしての資質・能力を高めるためには、参加者が研修で得た気付きや変容を、所属先に戻ってからも継続的に省察し、同僚との対話や協働を通じて再構成していくことが不可欠である。

こうした学びの連続性を確保する観点から、次年度は全ての参加者にインターバルの機会を設定できるよう、研修日程の改善を進めているところである。

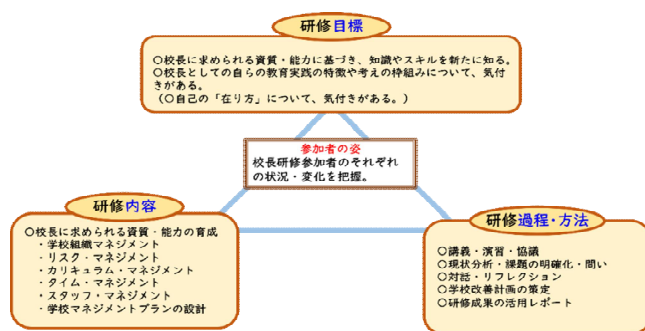


図2 研修デザインの三角形「校長研修」

表2 第3回校長研修 日程表

10月20日	10月21日	10月22日	10月23日	10月24日
月	火	水	木	金
8:45～9:15 受付	8:45～9:10 イントロダクション	8:45～9:10 イントロダクション	8:45～9:10 イントロダクション	8:45～9:10 イントロダクション
	休憩	休憩	休憩	休憩
9:15～9:30 開講にあたって ※	9:15～12:00 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 ※ 学校組織マネジメント	9:15～12:00 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 カリキュラム・マネジメント	9:15～12:00 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 スタッフ・マネジメント	9:15～12:00 (休憩:15分を含む) 演習・協議 学校マネジメントプランの設計
9:30～10:45 講義 令和の日本型学校教育の 実現に向けて 教職員支援機構 理事長 荒瀬克己 ※	国士舘大学 教授 北神正行	千葉大学 名誉教授 天笠茂	早稲田大学 教授 河村茂雄	和歌山信愛大学 教授 岸田正幸
休憩				
11:00～12:00 研修ガイダンス ※				
12:00～13:00 昼休憩	12:00～13:00 昼休憩	12:00～13:00 昼休憩	12:00～13:00 昼休憩	12:00～13:00 昼休憩
13:00～15:45 (休憩:15分を含む) 演習・協議 ※ 令和の日本型学校教育の 実現に向けて	13:00～15:45 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 ※ リスク・マネジメント 淑徳大学 教授 坂田仰	13:00～15:45 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 タイム・マネジメント 愛媛大学大学院 教授 露口健司	13:00～15:45 (休憩:15分を含む) 講義・演習・協議 学校マネジメントプランの設計 和歌山信愛大学 教授 岸田正幸	13:00～14:30 演習・協議 学校改善計画の策定
休憩				14:45～15:00 実践に向けて
16:00～17:00 リフレクション	16:00～17:00 リフレクション	16:00～17:00 リフレクション	16:00～17:00 リフレクション	

※第3回事務職員研修との合同開催

## ② 体力向上マネジメント指導者養成研修

機構における指導者養成研修は、学校経営の観点から教職員の意識・意欲を高め、学校の組織基盤を強化することや研修のマネジメントを推進する指導者を養成することを目指している。このうち、体力向上マネジメント指導者養成研修の目的は、次の通りである。

体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか意欲や気力といった精神面の充実に大きく関わっており、「生きる力」を支える重要な要素です。子供たちが、現在及び将来の体力の向上を図るために、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、進んで運動に親しむ資質・能力を身に付け、心身を鍛えることができるようにすることが大切です。

本研修では、学校全体で校長のリーダーシップの下に、日々の教育活動、学校の資源を一体的にマネジメントした、各学校や当該地域の実態等に即した子供たちの体力向上を図るための手

法等を修得します。また、マネジメントに必要な理論と同校種・異校種での実践を参照しながら、自校の取組をより多面的、系統的に見つめ直す視点を醸成します。その上で、1) 子供たちの体力に関する諸課題の改善に専門的知見を活用し、組織的な取組を推進する力、2) 学校や当該地域の教職員の専門性向上を推進する力、を習得した指導者の養成を図ります。

令和7年11月26日から11月28日の3日間にわたり、リアルタイム・オンライン研修として実施した(表3)。研修参加者は112名であった。

本年度より、講義の一部をオンデマンド化して事前課題として設定し、機構担当による対話的・省察的な学習の時間を拡充し、参加者一人一人の現場課題に即した深い学びを支える体制が強化された。

表3 体力向上マネジメント指導者養成研修日程表

事前課題(動画視聴)		体力向上とカリキュラム・マネジメント		日本体育大学 石田 有記						
8:45	9:15	10:10	10:20	11:40	12:40	14:10	14:25	16:05	16:15	16:45
1日目	受付	共有実践の振り返り	自己紹介の振り返り	研修ガイドの振り返り	第1講(演習・協議 80分)	第2講(講義・協議 90分)	第3講(講義・協議100分)	リフレクション		
				学びに向かうための資料読解・対話等	昼休憩	体力向上に関する現状と課題	学校全体で取り組む体力向上マネジメント			
				教職員支援機構		スポーツ庁政策課 教科調査官 塩見 英樹	桐蔭横浜大学 教授 佐藤 重			
2日目	受付	イントロダクション			第4講(事例発表【各30分程度】・協議・講義・演習)			リフレクション		
					体力向上マネジメントの実践例、校種別のマネジメントの在り方	校種別のマネジメントの在り方				
					遊び 事例発表(幼)・協議 休講 講義	遊び				
					中京大学 教授 中野 貴博	運動	同校種によるグループ演習			
					事例発表(小)・協議 休講 講義	生涯				
					熊本大学 准教授 末永 祐介					
					事例発表(中) 事例発表(高)・協議 休講 講義					
					東京学芸大学 教授 鈴木 聡					
3日目	受付	発表準備			第5講(演習・協議 135分) 休憩を含む		第6講(演習・協議 195分) 休憩を含む			実践に向けて
					体力向上マネジメントの在り方	研修成果の活用				
					異校種を交えた発表・協議	教職員支援機構				
					中京大学 教授 中野 貴博					
					熊本大学 准教授 末永 祐介					
					東京学芸大学 教授 鈴木 聡					

3日間の研修をデザインするにあたり、『研修観の転換』に向けたNITSからの提案」を参考にしながら、学習する参加者の視点に立ち、「研修を通じて、参加者にどのような気づきや変化があるか」(研修目標)を整理し、そのような気づきや変化が起きるために「何を学ぶか」(研修内容)を検討し、その内容を「どのように学ぶか」(研修過程・方法)という参加者の具体的な学びの姿を考え、研修デザインの三角形に整理した(図3)。また、研修をデザインするうえで、①対話の時間・内省の時間の十分な確保、②対話や内省の深まりをもたらす問いかけの工夫、③教材(学習材)の工夫を検討した。講師による専門的・実践的な講義は1日目午後から2日目午前までとし、参加者一人一人が所属先のカリキュラム・マネジメントについて、個人作業とグループでの検討をふまえて考察する時間を確保した。

研修のアンケートから、学び方に関する「インプット/対話/リフレクション」の評価は総じて高いが、必ずしも「自己変容」や「研修推進者としての在り方」に結びついていない可能性が示唆された。アンケートの自由記述は短文になりやすく、文章としてまとめようとする過程で大事な気づきが省かれてしまう可能性が高い。省かれた内容の中にこそ、参加者自身の変容や気づきが含まれていると考えられ、それこそが参加者の質的变化を捉えるうえで重要な情報ではないかと考察した。そのため、参加者が自身の変容をより具体的に捉え、言語化できるような仕組みづくりが求められる。また、研修内容の理解を問うのではなく、「変容の兆し」を拾い上げる視点を持ったリフレクションの設計や、自由記述を深めるための問いの工夫が必要である。

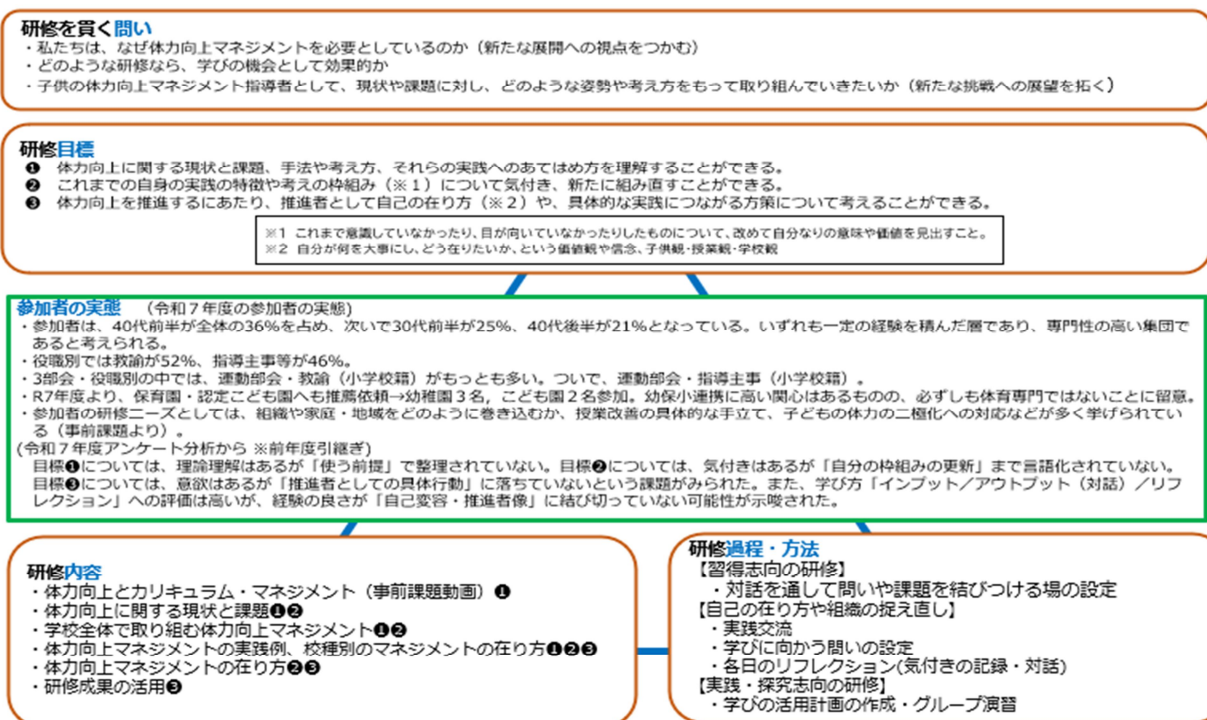


図3 研修デザインの三角形「体力向上マネジメント指導者養成研修」

### ③ 研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版）

本研修は、令和6年12月に「教職員の学び」に関する「学び合いのコミュニティ」の醸成を後押しすることを任務とするNITSフェローを委嘱し、「各学校や地域とともに教職員研修の充実を図る研修」として、令和7年度から新たに実施している。研修マネジメント力協働開発プログラム（地域版）として全国を7地域（北海道、東北、関東甲信越、東海北陸、近畿、中国・四国、九州）に分け、「学び合いのコミュニティ」の醸成や、それを通じた教職員研修の持続的な深まりに資するよう、各地域の研修担当者が、「教職員の学び」の在り方を協働的に問い、考え合う機会を提供するために年3回程度開催した。中国・四国地域の運営は、NITSフェロー2人とNITS職員2人で構成し、令和7年度は、高知県、広島県、鳥取県を会場に、対面で開催した。この研修の目的は、下記の通りである。

中央教育審議会答申（令和4年12月29日）は、子供たちの学び（授業観・学習観）の転換のためには、教師自身の学び（研修観）の転換を図る必要があると提言しています。

「研修観の転換」は、NITSの職員を含め、全国の研修担当者の学びについての「観」が、広がったり変わったりする営みであり、研修担当者が、これまでと異なる研修の在り方に取り組み、その経験から得られた「気付き」を共有し、学び合い、支え合う中で、徐々に展開していくものだと考えています。そのような発想のもと、NITSにおいては、この「研修観の転換」に向けた「学び合いのコミュニティ」が、教職員研修を実施している各地の組織（教育センター、教職大学院、学校等）の中で形成され、つながっていくことで、共創分散型の「学び合いのコミュニティ」が全国に形作られていくことを目指しています。

研修デザインの検討は、NITSフェローとオンライン会議システムを用いて協議を重ねながら行った。プログラムの原案はNITSフェローから提案されるが、「それぞれが有するアイデアや発想は等しく大切である」という考えのもと、地域担当のNITS職員も対等な立場で協議に加わった。各回の内容は、地域や参加者の状況に応じてデザインし、回を重ねながら改善していった（表4）。

第1回（高知県）と第2回（広島県）は、各教育センターが実施する探究型研修を視察し、研修の実施形態だけでなく、新たな研修を立ち上げ、実施に至るまでの試行錯誤のプロセスや研修

担当者が抱えた葛藤も共有した。他県の実践に触れることは、参加者にとって大きな刺激となり、自地域の研修をどのように改善し、新たな構想を生み出していかを考える契機となった。第3回（鳥取県）は、参加者と運営側がそれぞれ実践を持ち寄り、互いの経験を重ね合わせながら教職員の学びの在り方について考えた。

また、プログラム参加後の近況報告や悩みを相談する学び合いの場とした「また集まってみたよ！の会」をオンラインで開催した。これ以外でも参加者同士で自主的に連絡を取り合うなど、実践の共有が広がっている。

表4 令和7年度研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版）

	主な内容	会場	参加者
5月21日	第1回研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版）ガイダンス ・「新たな教師の学び」協働開発推進事業～研究開発担当の視点より～ ・発展期教諭等研修について～研修運営担当の視点より～	オンライン	24人
5月30日	第1回研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版） 午前 ・発展期教諭等研修視察 「研修参加者はどのように学ぶのか」 午後 ・「よい研修（教師の学び）とは」 「自分の地域で研修を行うとすると」	高知県教育センター	21人
7月17日	第1回また集まってみたよ！の会	オンライン	14人
10月3日	第2回研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版） 午前 ・となりの人の「人となり」（自己紹介） ①私が先生になるまでのエピソード ②先生になってから今に至るまでのエピソード 私たちは、どんな場面で学んできたか（視覚化） 午後 ・広島県教育センター「サポート力up研修」の視察 ①私たちは、どのように学んでいるのでしょうか ②私たちの学び（研修）をより良くするために、私がやっていきたいことは	広島県立教育センター	28人
11月14日 11月17日	第2回また集まってみたよ！の会	オンライン	17人
1月23日	第3回また集まってみたよ！の会	オンライン	9人
2月27日	第3回研修マネジメント力協働開発プログラム（中国・四国版） 午前 ・簡単自己紹介 ・となりの人の「人となり」（自己紹介） ①私が先生（他の仕事）を志したきっかけや経緯、大切にしていた思い出等 ②先生（他の仕事）についてから現在に至るまでの出会いや成長のエピソード ・私たちは、どんな場面で学んできたか（視覚化） 午後 ・ケーススタディ「あなたのアプローチはどのタイプ」 ・NITSメンバーの拡張（影響を受けた言葉や書籍） ・与えられた役割と学び（NITS審議役・地域担当者） ・自分が行う研修の場をよりよくするために、どんなことを心掛けたいですか ・振り返り	米子コンベンションセンター	63人

#### 4 自己の力量形成

探究型研修に先進的に取り組む他県の教育センターを視察するとともに、高等学校における総合的な探究の時間の取組や成果発表会に参加した（表5）。また、年間を通して、茨城県立竹園高等学校の生物基礎の授業を参観し、ICT機器の効果的な活用について学んだ。視察した探究型研修は、当機構の特別研修員がつくば本部での勤務を経て、地元のエデュケーションセンターで新規に立ち上げたものが多い。この1年の視察では、2年目特別研修員の役割や実践内容の具体について情報共有し、研修が地域に根づくまでのプロセスを理解する貴重な機会となった。また、高等学校における総合的な探究の時間の成果発表会では、生徒が自らの関心に基づいて自由にテーマを設定し、探究を深めている姿に大きな刺激を受けた。生徒の学びの可能性を狭めることなく、学校としてどのように学びの場を整えていくべきかについてあらためて考えた。探究では成果を求めがちであるという声も聞かれるが、生徒一人一人が没頭できる学びを実現し、プロセスを丁寧に評価していく姿勢こそが、探究の本質を支えるものであると感じた。

引き続き、他県の先進事例や生徒の実践から学びを深めつつ、今後の研修デザインの改善や研修観の転換に向けた取組を着実に推進していきたい。

表5 令和7年度先進地視察等

5月7日	総合的な探究の時間 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
6月5・7日	NEW EDUCATION EXPO2025参加
6月16日	令和7年度各教科等担当指導主事連絡・研究協議会（高・理科部会）参加
6月18日	生物基礎 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
6月26日	授業参観・意見交換（つくば市立桜中学校）
7月6日	実践研究 福井ラウンドテーブル2025サマーセッション参加
7月10・11日	生物基礎 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
7月31日	子どもの学びづくり探究研修視察（滋賀県総合教育センター）
8月22日	発展期教諭等研修視察（高知県教育センター）
9月14・15日	未来の先生フォーラム2025参加
9月18・29日	生物基礎 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
10月28日	さいたま市教師塾「夢」講座 第11回デザイン思考体験研修参加（さいたま市立教育研究所）
10月31日	行政リーダー・ダイアログ（岡山大学）
12月13日	第2回研修マネジメント力協働開発プログラム（東北版）（秋田県総合教育センター）
12月14日	令和7年度日本教職大学院協会研究大会参加（秋田大学）
12月17日	京都市立京都工学院高等学校視察
12月25日	埼玉県探究活動生徒発表会（日本薬科大学さいたまキャンパス）
1月7日	つくば市金夜サイエンスカフェ ファシリテーター参加
1月22・27日	生物基礎 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
1月28日	令和7年度 新たな教師の学びを共創する調査研究（さいたま総合教育センター）
1月30日	日本科学未来館視察
1月31日	探究学習合同発表会参加（東京都立大学高大連携室）
2月2・5日	生物基礎 授業参観・意見交換（茨城県立竹園高等学校）
2月13日	発展期教諭等研修視察（高知県教育センター）
2月17日	所員研修参加（香川県教育センター）
2月21・22日	実践研究 福井ラウンドテーブル2026スプリングセッション参加
3月5日	第2回研修マネジメント力協働開発プログラム（九州版）（崇城大学）

## 5 特別研修員1年目を終えて

12月頃まで、どうしても機構としての正解を探そうとする自分がいた。しかし今は、むしろ「正解はない」と捉える方が学びを豊かにするのではないかと考えている。同じNITSマネプロを経験していても、特別研修員5人の気付きは多様であり、マネプロ（地域版）でも各ブロックに応じたアプローチは全く異なっていた。だからこそ、自分たちが問い始めたことを自分たちで考え、問い直してよい。そのプロセスこそが主体的な学びであり、そこに他者と協働した試行錯誤が加われば対話的な学びとなり、その重なりが深い学びへとつながっていく。この一年を通して、私は、ようやく「主体的・対話的で深い学び」を実感をもって体験することができたように思う。

高知県教育センターでは、教職員の専門性向上に向けて研修の質向上を進めている。令和8年度は発展期教諭等研修を含めた8つの研修を探究型研修として運営する計画である。私は2年目特別研修員として、機構で試行錯誤を重ねながら学んできた研修デザインの考え方を生かし、主体的・対話的で深い学びを中心とした研修の充実に取り組みたい。

機構の荒瀬理事長が校長研修初日の講義で示された「学校は何のためにあるのか」、「どうあればもっとよいのか」、「それは誰にとってか」、「あなたはどうか」 という問いかけについて、私は参加者や同僚と真摯に向き合ってきた。今度は、高知県教育センターの職員や学校の先生方とともに、この問いを考え、「教育を通して最終的に何を実現したいのか」を探究していきたい。そして、機構での一年を通して出会った安心して自分の考えを出せる対話の場を、今度は私自身がデザインしていきたい。

### 【参考資料】

独立行政法人教職員支援機構（2022）：NITS 戦略～新たな学びへ～

独立行政法人教職員支援機構（2024）：『研修観の転換』に向けたNITSからの提案（第一次）～豊かな気付きの醸成～

## 令和7年度 研究紀要

---

令和8年3月

発行 高知県教育センター

〒781-5103 高知市大津乙181番地

電話 088-866-3890 FAX 088-866-0074

<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/>